

# 家族機能が青年期危機に及ぼす影響について

三宅 義和

## 1. 目的（問題）

青年期危機<sup>1)</sup>については明確な定義があるわけではない。が、安田（2004）が「およそ青年期という人生の移行期において心理・身体的要因により均衡が崩れ心身が不安定な状態になること」としているように、青年期は深刻な悩みや心の問題を生じやすく、それゆえ危機的な時期であるという見方は、おおよそを獲ている。発達理論においては児童期から青年期への移行には質的な不連続<sup>2)</sup>が存在するとされる。その先駆けとなる思春期において身体における急激な変化と性的機能の充実いわば第二性徴が始まり、その後心理的社会的自立に向かうプロセスの中で、親からの独立と依存の葛藤、友人関係や異性関係の悩み、進路選択問題でのつまづきなどを経験する。自我が弱かったり、適切な対処資源が不足していたりすると、これらの問題は社会不適応や精神的不健康を生じる基となる。長尾（1989）は自らの臨床経験ふまえ、青年期の危機を二つの観点から、つまり発達上の転換点という意味と社会的適応の上において問題を生じやすい危険な状況という意味から捉え、改めて青年期の自我発達上の危機<sup>3)</sup>とした。

自我発達の見点からは、青年期は両親との関係が適切に変化していくという点が重要である。児童期においては親にある程度密着していた子どもの自我は青年期を通過していく中で、親から分離していく過程を辿っていく。日常においては劇的に変わることのない毎日ではあるが、子どもに密着しながら子どもを守る親から、子どもとの距離をあげながらも遠くからその成長を見守るという親の態度に変化していく<sup>4)</sup>ことこそが、青年期にある子どもの自我形成にとって重要である。

家族機能については、性的機能、社会化機能、経済機能、情緒安定機能、福祉機能などの機能があるとされているが、とりわけ情緒安定機能は、臨床心理学的な観点からは重要な意味を持つ。

---

1) クレッチマーによって提唱された概念であるが、オウファーは大多数の青年には認められないとして青年期平穩説を唱えた。

2) 質的な不連続があるという見方を否定している発達理論も存在している。

3) 長尾（1989）はこの言葉について「児童から成人へと転換する青年前期から後期にかけて、自我発達上の課題、すなわち青年前期頃より始まるこれまでの親に対する心理的に依存した関係からいかにして独立したものへと展開してゆくか、あるいは青年後期より始まる自分とは何者か、つまり社会の中でいかにして思想的に自分を位置づけるかという自我同一性の確立の問題に関する決断に迫られた際、それらの決断が困難となって、既述した『危機』という語の前者の意味であるところの親子関係上のアンビバレンスや交友関係上での自己収縮が高まり、過去からのあらゆる心的葛藤が露呈しやすい特徴を示す状態が生じ、その結果、とくに自我の弱い者は、現象として、既述した『危機』という語の後者の意味であるところの不登校や反社会的行動などの問題行動や抑うつ、心気、強迫、恐怖などの神経症的反応、あるいは摂食障害や身体的痛みなどの精神・身体的反応などを伴う不適応状態を呈することもある」と長い定義を行っている。

4) 落合（1995）の分類を参考にしている。

家族が安らぎの場、憩いの場であることは自我が健全に発達していくための一つの条件であり、その機能が不十分であるような家族、すなわち機能不全家族は、自我発達と社会適応上の問題を招くとされてきた。また、家族療法の理論では、家族の成員の誰かが問題を抱えた時、それは個人の問題としてとらえるのではなく家族システム<sup>5)</sup>の問題であると見なしているように個人が社会適応を果たしていくためにも、家族システムのあり方はきわめて重要である。

青年期の子どもにとっても親のあり方は重要であるが、親-子という二者関係を包摂する家族システムとその機能から青年期危機を論じることは、より意味のある視点だと考えられる。しかしながら、家族機能の点から青年期危機を論じた研究はあまり見られない。先述したように、長尾(1989)は青年期を転換点としての危機と不適応上の危機という二つの側面で捉えたが、青年期中期・後期にあたる高校生・大学生においては、日常のライフイベントと自我の強さが、青年期の心の葛藤に影響を及ぼし、それが青年期の不適応を招くことを明らかにしている(長尾, 2005)。そこで、本研究では青年期の心の葛藤に影響を及ぼす要因として家族機能を考え、長尾の考えに従って、以下のような仮説を立てる。

仮説1：家族機能は、青年の心の葛藤に影響を与えている。つまり、家族機能がよりよく働くと、心の葛藤を低減させるであろう。

仮説2：家族機能は、青年期の不適応と直接結びついてはいないが、青年の心の葛藤を通じて、不適応に影響する。

この論文の目的は、この仮説を検証すること、そしてそれがどのようなしくみで表れていくのかを示すことにある。

## 2. 方法

- ・調査時期：2011年7月と2012年6月。
- ・調査対象：A大学の学生、1年生から4年生<sup>6)</sup>までの152名(男性117名、女性29名、不明6名)を分析対象とした。
- ・使用尺度：青年期危機尺度と家族機能測定尺度

### (1) 青年期危機尺度

この尺度は長尾(1989)による青年期危機の捉え方、つまり発達上の転換点という意味と不適応な状態に陥りやすい危険な状況という意味が含まれているという考えに基づいて、長尾自身によって作成されている。

発達上の転換点では親子関係における独立と依存の問題やアイデンティティの確立など、青年期特有の葛藤が生じる。この青年期の心の葛藤を測定する尺度はA水準と呼ばれ、26項目によって成り立っている。この尺度は7つの下位尺度、つまり「決断力欠如」「同一性拡散」「自己収縮」「自己開示対象の欠如」「実行力欠如」「親とのアンビバレント感情」「親からの独立と依存のアンビバレンス」を有しており、因子的妥当性も確認されている。この尺度の各項目は5件法によって評定される。

また、このような葛藤がうまく解決されなかった場合、環境に対する不適応や精神医学的問題を生じやすい。いわば、青年期に見られる危険な状態を意味するが、このような青年期の不適応を測定する尺度がB水準で、24項目より成り立っている。この尺度は7つの下位尺度、つまり「緊

5) ビーバーズシステムやオルソンの円環モデルなどが提唱されている。

6) 若干名の留年生も含まれる。

表 1. A水準（青年期の心の葛藤）の下位尺度

名 称	意 味	項目数
決断力欠如	大切なことの決断ができない	5
同一性拡散	自分がどんな人間なのか特徴がつかめない	6
自己収縮	自信がない、存在感が乏しい	3
自己開示対象の欠如	心を開いて話せる相手がいない	2
実行力欠如	何かを行う実行力がない	3
親とのアンビバレントな感情	感情的に親への甘えと独立の葛藤がある	3
親からの独立と依存のアンビバレンス	考え方のうえで親の考えと自分の考えとに葛藤がある	4

出典：『ACS／青年期の危機尺度 使用解説書』千葉テストセンター 6 ページの表より改編

表 2. B水準（青年期の不適応）の下位尺度

名 称	意 味	項目数
緊張とその状況の回避	イライラが強く、その場を逃げ出したい気持ち	6
精神衰弱	特にうつ状態	4
身体的痛み	心因からくる頭痛、腰痛など	2
稀な体験や精神・身体的な反応	食欲不振や神秘的体験	4
閉じこもり	不登校傾向、引きこもり傾向	3
身体的疲労感	心因性の疲労感	3
対人的過敏性	人の目を気にしやすい	2

出典：『ACS／青年期の危機尺度 使用解説書』千葉テストセンター 6 ページの表より改編

張とその状況の回避」「精神衰弱」「身体的痛み」「稀な体験や精神的・身体的反応」「閉じこもり」「身体的疲労感」「対人的融通性」を有しており、因子的妥当性も確認されている。

なお、このA水準、B水準両尺度とも、性差や学年差がないことが明らかにされている。また、信頼性や妥当性（内容的妥当性と併存的妥当性）も確認されている（長尾，2005）。

## （2）家族機能測定尺度

オルソンら（1985）の円環モデルに従って作成された FACES III を草田・岡堂（1993）が邦訳した尺度を用いた。この尺度は、「凝集性」「適応性」の2因子の下位尺度<sup>7)</sup>を持ち、両尺度とも10項目からなる。5件法で回答を求め、それぞれの項目に1～5点が与えられる<sup>8)</sup>。

しかしながら、この尺度については、信頼性や因子的妥当性が確認されたという報告（草田，1995）がある一方、未だ実証されていないという指摘もある（立山，2006）。そこで本研究では、まず、今回得られたデータを因子分析し、草田らが想定した因子構造が得られなかった場合、今回のデータで行われた因子分析の結果を基に、その後の相関分析をすすめていくことにする。

7) 日本語版 FACES では、「凝集性」「適応性」共にある得点基準に従って、それぞれ四つの区分（「遊離」「分離」「結合」「膠着」「硬直」「構造化」「柔軟」「無秩序」）に分けられる。

8) 逆転項目には5～1点が与えられる。

### 3. 結果

#### (1) 家族機能測定尺度の因子分析

まず、通過率を検討した。一方の極に回答が集中するような歪んだ分布になった項目は見あらず、すべての項目がほぼ分布の正規性を保っていた。

次に、20項目の内的一貫性を検討するため、クロンバッハの $\alpha$ 係数を算出したところある.8688であった。しかし、18「私の家族では、みんなを引っ張っていく者（リーダー）が決まっている」、20「私の家族では、家事・用事の役割が決まっている」の二つの項目は、全項目の総和と負の相関があった<sup>9)</sup>。これらの、項目を除いた場合の $\alpha$ 係数はそれぞれ.8901、.8936と上昇するため、この2項目を除き、再度 $\alpha$ 係数を算出したところ.9124となった。

そして、18項目を主成分分析したところ、分散の累積説明率が2成分までで49.03%となった。そこで因子数を2とし、主因子法バリマックス回転によって因子分析を行った（表3参照）。この結果からは、オルソンらが想定する「凝集性」「適応性」の因子を抽出できなかった<sup>10)</sup>。どちらの因子にも負荷量の高い項目があり、解釈しにくかったが、因子負荷量が比較的高い項目に注目して因子の解釈を行った。なお、因子得点の計算は、因子負荷量が.30以上の項目の素点の合計とした（ただし.30以上であっても他因子への負荷量が高い場合は、その因子を構成する項目からは除外した）。

第1因子への負荷量の高い項目をあげると、17「私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する」、15「私の家族では、みんなで一緒にしたいことを思いつく」、13「家族で何かをする時は、みんなでやる」、10「私の家族では、叱り方について親と子で話し合う」、9「私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている」、5「私の家族は、家族みんなで何かをするのが好きである」、11「私の家族は、心理的に密着している」などであった。そこで第1因子を「家族親和性」と命名した。なお、この下位尺度の信頼性係数 $\alpha$ は.8894であった。

また、第2因子への負荷量の高い項目を列挙すると、4「私の家族は、子供（あなた）の言い分も聞いてしつけをしている」、2「私の家族では、問題の解決に子供（あなた）の意見も聞いて

表3. 家族機能測定尺度の因子分析

項目内容	第1因子	第2因子
17 私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する。	.738	.320
15 私の家族では、みんなで一緒にしたいことを思いつく。	.693	.263
14 家族の決まりは必要に応じてかわる。	.679	.283
13 家族で何かをする時は、みんなでやる。	.653	.374
10 私の家族では、叱り方について親と子で話し合う。	.594	.069
16 私の家族は、必要に応じて、家事や用事を交代する。	.569	.257
9 私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている。	.515	.464
5 私の家族は、家族みんなで何かをするのが好きである。	.501	.453
11 私の家族は、心理的に密着している。	.463	.382
8 私の家族では、問題の性質に応じて、その取り組み方を変える。	.445	.435
4 私の家族は、子供（あなた）の言い分も聞いてしつけをしている。	.143	.767
2 私の家族では、問題の解決に子供（あなた）の意見も聞いている。	.235	.688
3 家族のそれぞれは、それぞれの友人をとても大切にしている。	.138	.563
1 私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める。	.346	.515
7 他人よりも家族の方が、お互いに親しみを感ずる。	.282	.501
19 家族のまとまりが強い。	.473	.492
12 私の家族では、子供（あなた）が自主的に物事を決めている。	.277	.383
6 家族を引っ張っていく者（リーダー）は、状況に応じて変わる。	.234	.314

9) これらの項目は逆転項目であるが、分析の対象となるデータセットの中では逆転の処理を行っている。

10) 通過率を検討するまでに、まず20項目で因子分析を試みたが、オルソンらが想定したような2因子構造は見出されなかった。

いる」、3「家族のそれぞれは、それぞれの友人をととても大切にしている」、1「私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める」、12「私の家族では、子供(あなた)が自主的に物事を決めてる」、6「家族を引っ張っていく者(リーダー)は、状況に応じて変わる」であった。そこで第2因子を「各メンバーの尊重と信頼」と命名した。この下位尺度の信頼性係数 $\alpha$ は.8044であった。

### (2) 家族機能測定尺度とA水準(青年期の心の葛藤)との関連

家族機能測定尺度で抽出された2因子とA水準(青年期の心の葛藤)の下位尺度の7因子ならびに総得点とのスピアマンの相関係数を表4に示す。

「家族親和性」は、A水準の「自己収縮」「自己開示対象の欠如」「総得点」と有意な負の相関があった( $r = -.267, p < .01, r = -.174, p < .05, r = -.175, p < .05$ )。「各メンバーの尊重と信頼」は、「決断力の欠如」「自己収縮」「自己開示対象の欠如」「総得点」と有意な負の相関があった( $r = -.210, p < .05, r = -.304, p < .001, r = -.177, p < .05, r = -.223, p < .01$ )。概して言うと、家族機能はA水準の「自己収縮」「自己開示対象の欠如」「総得点」と負の関連をなしていた。つまり、家族親和性や各メンバーの尊重と信頼といった面で家族の機能度が高くなると、自信がない、存在感が乏しい、心を開いて話せる相手がいないという心の葛藤を低減させる、と考えられた。

### (3) 家族機能測定尺度とB水準(青年期の不適応)との関連

予想通り、家族機能の2因子「家族親和性」「各メンバーの尊重と信頼」は、B水準における下位因子のどれとも、有意な相関はなかった。

### (4) A水準(青年期の心の葛藤)とB水準(青年期の不適応)との関連

長尾(1989)の報告では、A水準の「同一性拡散」とB水準のほとんどの下位因子と有意な相関を、またB水準の「緊張とその状況の回避」「精神衰弱」とA水準のほとんどの下位因子と有意な相関をなしていた。今回の結果もそれと同様の傾向が見られたが(表6参照)、それ以上に有意な組み合わせが多かった。

家族機能の「家族親和性」「各メンバーの尊重」に関係の深かったA水準の「自己収縮」「自己開示対象の欠如」に注目してみる。「自己収縮」で有意な相関をなしていたのはB水準の「精神衰弱」「身体的痛み」「閉じこもり」「身体的疲労感」「対人的融通性」「総得点」であり( $r = .253, p < .01, r = .203, p < .05, r = .189, p < .05, r = .207, p < .05, r = .222, p < .01, r = .239, p < .01$ )、「自己開示対

表4. 家族機能尺度とA水準(青年期の心の葛藤)のスピアマン相関係数

	決断力の欠如	同一性拡散	自己収縮	自己開示対象の欠如	実行力欠如	親とのアンビバレントな感情	親からの依存とアンバランス	A水準総得点
家族親和性	-.129	.007	-.267 **	-.174 *	-.015	-.157 +	-.095	-.175 *
各メンバーの尊重と信頼	-.210 *	-.046	-.304 ***	-.177 *	-.084	-.142 +	-.084	-.223 **

\*  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

表5. 家族機能尺度とB水準(青年期の不適応)のスピアマン相関係数

	緊張とその状況の回避	精神衰弱	身体的痛み	稀な体験や精神・身体的な反応	閉じこもり	身体的疲労感	対人的融通性	B水準総得点
家族親和性	.031	.094	.055	.077	.090	.037	-.072	.075
各メンバーの尊重と信頼	-.144 +	.071	-.091	-.043	-.004	-.119	-.013	-.068

\*  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

表 6. A水準（青年期の心の葛藤）とB水準（青年期の不適応）のスピアマン相関係数

	緊張とその状況の回避	精神衰弱	身体的痛み	稀な体験や精神・身体的な反応	閉じこもり	身体的疲労感	対人的融通性	B水準総得点
決断力の欠如	-.053	.175 *	.133	-.089	.130	.204 *	.208 *	.113
同一性拡散	.500 **	.522 ***	.273 **	.191 *	.237 **	.222 **	.353 ***	.563 ***
自己収縮	.079	.253 **	.203 *	.053	.189 *	.207 *	.222 **	.239 **
自己開示対象の欠如	.132	.162 *	.064	.027	.166 *	.158 +	.196 *	.212 **
実行力欠如	.082	.287 ***	.115	-.011	.283 ***	.200 *	.275 **	.253 **
親とのアンビバレントな感情	.219 **	.100	-.002	.144 +	-.027	.035	.204 *	.192 *
親からの依存とアンビバレンス	.203 *	.133	-.001	.024	.016	.111	.084	.159 +
A水準総得点	.317 ***	.429 ***	.212 *	.070	.273 **	.295 ***	.360 ***	.454 ***

\* p&lt;.10 \*\* p&lt;.05 \*\*\* p&lt;.01 \*\*\*\* p&lt;.001

象の欠如」の場合、B水準の「精神衰弱」「閉じこもり」「対人的融通性」「総得点」であった ( $r = .162, p < .05$ ,  $r = .166, p < .05$ ,  $r = .196, p < .05$ ,  $r = .212, p < .01$ )。なお、A水準の総得点は、B水準のほとんどと有意な相関にあった。要約すると、「家族親和性」「各メンバーの尊重」といった面で家族の機能度が低いと、自信がない、話せる相手がいないという面で心の葛藤を生じ、それが、うつ状態、ひきこもり傾向、対人過敏（対人恐怖）を引き起こすと考えられる。

#### 4. 総合的考察

今回、家族機能測定尺度を因子分析したが、オルソンらが想定した因子は抽出されず、表3が示すような結果となった。両因子に比較的高い負荷量を示した項目が多く、また「適応性」に関係の深い項目のまとまりも悪かった。このような傾向は、貞木（1992）、茂木（1994）、立山（2006）もほぼ同様の結果であったことを報告している。これには、以下の理由が考えられるだろう。文化的な差異によって因子構造が異なるかもしれないということ、それに因んで今の項目では想定された因子を抽出しにくい項目群になっている可能性がある。文言修正だけではなく、項目の追加・削除を検討する必要があるのではないか。ただ、サンプリングが偏っていたという可能性も否定できない。そういう意味では今後、対象数を拡げて調査する必要がある。

今回の結果から、家族機能について二因子を見出し、「家族親和性」「各メンバーの尊重と信頼」と命名した。今回命名した「家族親和性」については、従来、見出されている「凝集性」だけでなく、西出（1993）が家族機能の因子として見出した「親密で自由な家族内交流」「家族組織の柔軟性」を含むものと考えられる。また「各メンバーの尊重と信頼」は、「適応性」の一部に相当すると考えられる「家族組織の柔軟性」を中心としながらも、凝集性の一部を含む概念でもあった。やはり、家族機能測定尺度邦訳版の項目を精査する必要がある<sup>11)</sup>のではないか。

次に、仮説の結果についての考察を行う。全体的に見ると、家族の不機能がA水準（青年期の心の葛藤）への影響を通して間接的にB水準（青年期の不適応）に影響を及ぼすという当初の仮説は支持されたといえる。今回の研究で見出された家族機能とは「家族親和性」「各メンバーの尊重と信頼」であった。これらが、「自己収縮」（自信のなさや存在感の乏しさ）や「自己開示対象の欠如」（話せる相手の欠如）を促し、それが「精神衰弱」「身体的痛み」「閉じこもり」「身体的疲労感」「対人的融通性」といった種々の不適応状況を生み出していると、言い換えることができ

11) 家族機能測定尺度の因子的妥当性の問題も存在するが、その問題とは独立して、この尺度で抽出された因子は、他の心理特性との関係においてリニアな関係を描く、という報告が多い。今回の結果も、オルソンらが仮定した家族機能の二次曲線的な関係は支持されなかった。

る。

横山ら（2011）は家族機能が自己肯定感に関係すると報告した。家族と中でも発達初期における両親との関係は後の対人関係の基盤となるように、「凝集性」「適応性」といった家族機能は、強くてしなやかな自我の形成に役立ち、それがうまく働くことで青年期の心の葛藤水準を抑えると考えられる。また、青年期は自己への評価がゆれやすくそれゆえ他者からの承認が必要な時期である。周囲の友人などの他者からの肯定的な評価が得られない場合、精神的不健康に結びつきやすい。強くてしなやかな自我は、他者との開かれた対人関係を基にして精神的な健康を保ち得ると考えられる。

その一方、今回の結果からは家族機能とアイデンティティ拡散との間に関連を見出すことはできなかった。家族機能はアイデンティティ発達に大きく関与しているという報告は多い（白石・岡本，2005）。先述したように家族機能の測定の方に問題があったかもしれない。が、内田・広田（2008）は、アイデンティティ達成群に特徴的なのは、小学校の頃より大学生である今の方が家族の凝集性が高く、そして拘束性が低いという結果を見出している。この結果からみられるように児童期から青年期にかけての家族機能の変化が重要であるかもしれない。これからの検討課題であろう。

#### 【引用・参考文献】

- 福島章（1992）『青年期の心』講談社現代新書  
 平石賢二編著（2008）『思春期・青年期のこころ』北樹出版  
 堀洋通（監）・吉田富士雄編『心理測定尺度集Ⅱ』サイエンス社  
 伊藤桂子（2005）「青年期の家族機能認知に関する研究」臨床教育心理学研究 第31巻第1号 pp.1-13  
 草田寿子（1995）「日本語版 FACES Ⅲの信頼性と妥当性の検討」カウンセリング研究 第28巻 pp.154-162  
 茂木千明（1994）「家族機能査定に関する研究」家族心理学研究 第8巻 pp.95-108  
 長尾博（1989）「青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み」教育心理学研究 第37巻第1号 pp.71-77  
 長尾博（2007）『ACS／青年期の危機尺度 使用解説書』千葉テストセンター  
 西出隆紀（1993）「家族アセスメントインベントリーの作成—家族システム機能の測定—」家族心理学研究 第7巻（1）pp.53-65  
 落合良行・斎藤誠一・伊藤裕子（2002）『青年の心理学』有斐閣  
 貞木隆志ら（1992）「家族機能と精神的健康」心理臨床学研究 第10巻（2）pp.74-79  
 白石尚大・岡本祐子（2005）「大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達、家族機能の関連性」青年心理学研究 第17号 pp.1-14  
 立山慶一（2006）「家族機能測定尺度（FACES Ⅲ）邦訳版の信頼性・妥当性に関する一研究」創価大学大学院紀要 第28巻 pp.285-306  
 内田利広・越知照子（2009）「家族機能からみた大学生の自我同一性の形成について」京都教育大学紀要 No.114 pp.19-28  
 安田郁（2004）「青年期における羞恥感情に関する研究—青年期危機との関係から—」九州大学心理学研究 第5巻 pp.247-255  
 横山里沙・久保田瑞・古田真司（2011）「中学生における感動体験と自己肯定感の関連についての検討—学校適応と家族機能の影響に注目して—」東海学校保健研究 35（1）pp.17-24